

教育の連続性を踏まえた 「主体的な学習者」の育成の あり方を考える

学校現場は「第5回 学習基本調査」の結果をどう受け止めたのか。現場の実態と照らし合わせた上で、今後、「主体的な学習者」を育むためには、どのような指導や学び方が必要だと考えているのか。小学校、中学校、高校、大学それぞれの立場から、学校段階の枠を超え、これからの教育のあり方について語り合った。

子どもの主体性は育まれているのか？

家庭学習時間の増加は どのような指導の成果なのか

木村 まず、各校の紹介からお願いします。

田村 東京都足立区立千寿小学校は、2002年、伝統ある2校が統合して開校しました。近年、地域の再開が進み、児童数が急増しています。
加藤 埼玉県鴻巣市立吹上中学校は、16年度に創立70周年を迎えます。鴻巣市は、埼玉県のほぼ中央にあり、

荒川が流れる穏やかな雰囲気の地域です。

千葉 福島県立福島東高校は、福島市のほぼ中心部にあり、国立大学志望の多い中堅の進学校です。文武両道を校是とし、学習と部活動の両立による自己実現を図っています。

片山 香川県高松市立の高松第一高校は、県内有数の進学校で、10年度からSSHの指定校です。国立大学志望者が多く、卒業後、約7割の生徒が国立大学へ進学します。

樋田 青山学院大学教育人間科学部で高校教育を中心に研究しており、高校研究は30年以上続けています。「第5回 学習基本調査」の調査企画・分析メンバーを務めました。データを俯瞰すると大きな流れは見えます

が、大きな変化は、小さな変化の積み重ねで起こるものです。今日は、先生方が現場で感じていることや、児童・生徒がどのように変化しているのかなどについて、お聞かせください。

木村 ありがとうございます。それでは議論に移りましょう。今回の調査結果で最も注目されているのは、小・中・高ともに家庭学習時間が増

えたことです。宿題の増加が一因と考えられますが、いかがでしょうか。

田村 文部科学省「全国学力・学習状況調査」が始まってから、自治体や学校が学力向上に力を入れ始めたことが背景にあると思います。授業の進め方だけでなく、宿題の出し方も、担任に任せきりにせず、自治体や学校規模で工夫するようになりました。その結果、成績下位層の子どもでも、自力で学習を進めやすくなり、一定の学力が担保されているのです。
加藤 同感です。埼玉県は、県独自に学力・学習状況調査を実施しており、どの学校も学力向上に取り組ん

でいます。本校も学力向上計画を作成し、家庭学習の重要性を含めた指導に力を入れています。

片山 本校も生徒の家庭学習時間は、以前より増えたと感じています。ただ、毎日30分以下という生徒も、3

時間以上という生徒も一定数いて、二極化の状況です。本校では、生徒の主体性を育むため、宿題の量は比較的少なめです。ただ、他校の先生と初期指導について話をすると、入学直後に合宿などを行い、授業や家庭での学習法を指導する高校が増えてくるようです。そうした高校では宿



福岡県立福岡東高校
進路指導主事
千葉 聡
ちば・さとし



高松第一高校
(香川県高松市立)
進路指導主事
片山 浩司
かたやま・こうじ



青山学院大学
教育人間科学部教授
樋田 大二郎
ひだ・だいじろう

題の量も多いようで、その影響で学習時間が増えたのだと思います。

千葉 最近、予備校や公共施設などが自由に学習できる場を開放している、そこで生徒が定期考査前などに学習する姿が見られます。勉強に集中できる環境が整ってきたことが、前向きな学習態度につながっている

のかもしれない。本校では、学年ごとに教科間で話し合っただけの分量を調整しつつ、比較的多くの宿題を出しています。宿題をこなすだけの受け身の生徒もいますが、全体的に学習時間は増えていると感じます。



埼玉県
鴻巣市立吹上中学校
校長
加藤 幸弘
かとう・ゆきひろ



東京都
足立区立千寿小学校
校長
田村 正弘
たむら・まさひろ



ベネッセ教育総合研究所
副所長
木村 治生
きむら・はるお

「自学ノート」で育む 児童・生徒の主体性

木村 望ましい学習態度が強化されるなど、質の向上も見られます。

片山 確かに、以前に比べて生徒は真面目です。授業で議論をさせると、積極的に意見を出しますし、プレゼンテーションも上手です。そうした点は今の生徒の長所でしょう。その反面、最後まで自分で考え抜くという粘り強さがなく、すぐに答えを求めめる傾向があります。

加藤 中学校でも真面目な生徒が増え、一昔前のように、授業中に周囲に迷惑をかけるような生徒はほとんどいません。本校でいえば、全校共通の学習規律を設け、教師間の指導の差をなくしたことが大きいと思います。ただ、学習意欲については、学力と同様に、二極化が見られ、中位層以上の生徒がより意欲的となっている印象を受けています。

田村 子どもの学習態度が改善している一因は、学力向上策の一環として指導の標準化が進んでいるから

ではないでしょうか。学校としての明確な指導方針があると、経験の少ない教師でも一定の指導ができますし、担任が代わっても指導がぶれないため、子どもは次に何をすればいいかが分かり、安心して学べます。足立区では、児童に基礎学力を定着させた上で中学校に送り出すことを、区全体で目指しています。

木村 調査では、小・中学校ともに「自学ノート」が定着していることも分かりました。そうした学習形態が、子どもの主体性を引き出している側面は大きいのでしょうか。

田村 本校では、「家庭学習の習慣化」「主体性の育成」「個に応じた学習」を目的として、自学ノートに取り組みさせています。自学ノートでは、自分の興味・関心に沿って課題を決められるため、学習意欲が湧きやすく、達成感も得られやすいようです。提出は任意ですが、できるだけ毎日取り組むように児童に働きかけていて、提出率は毎日ほぼ100%です。内容は自由ですから、昆虫好きの子どもが、昆虫についてずっと探究し

*プロフィールは2016年3月時点のものです

続けるケースもあります。

加藤 本校でも、全学年で自学ノートを実施しています。ただ、自学ノートとはいえ、高校入試を控える3年生では、内容が不十分な生徒を昼休みに集めて、再度取り組ませることで、学力向上につながっています。

木村 教科の好き嫌いでは、ほぼ全教科で、その教科を「好き」と答える子どもの割合が増えていましたが、中学校の理科では減少していました。

加藤 本校の上位層の生徒に理科について聞くと、「力や電流など、目に見えない現象について考えるのが

難しい」と話していました。あくまでも一生徒の意見ですが、うなずける部分もあります。

田村 小学校では理科好きが増えていましたが、その要因の1つには、現行の教育課程で授業時数が増えるとともに、国からの補助金がついたため、各校の実験器具が整備され、観察や実験が充実してきたことが挙げられると思います。

加藤 中学校の理科は、現行の教育課程で学習内容が増えたため、授業にゆとりがないでしょう。16年度は理科の教師1人の増員を希望し、指導の工夫を図っていく予定です。

アクティブ・ラーニングの本質とは？

学力の3要素を伸ばす 授業のあり方とは

木村 調査では、能動的な学習活動に関する項目で「好き」の割合が増えています。学校段階にかかわらず、主体的な学習者の育成は大きな課題です。各校の、いわゆるアクティブ・ラーニング（以下、AL）の現状を

教えてください。

田村 小学校では、ALはかなり定着しています。一例ですが、複数の解から最適解を選ぶという算数の授業を紹介します。課題は、「メロン、スイカ、リンゴを仕入れ、利益が原価の50%になるように定価をつけて売上目標を達成するために、それぞれ何割引で何個販売すればよいの

かを算出する」という内容です。個人で考えた後、グループで話し合う

のですが、「その店の地域の世帯数はどれくらいか」「他店と比べて値段が高すぎないか」といった実生活にもありそうな条件をつけ加えたので、子どもたちは楽しそうに取り組んでいました。この問題は、基礎学力はもちろん、実生活にも役立つ思考力が鍛えられる問題であり、学力の3要素を総合的に高めることができたと考えています。

樋田 それは素晴らしい授業だと思います。まず自分で課題を見つけ、そして、それを解決するための方略を考え、答えらしきものが複数出たら、その中から最適解を選ぶ。そういった課題解決型学習が実践されています。課題解決型学習では、「どれくらい学力の3要素が身について



「唯一解ではなく、最適解を
追い求める学びを」

青山学院大学 教授 樋田大二郎

いるか」という視点を持つことが、学びを充実させる鍵だと思います。

加藤 本市では、「ALをより充実させる」という方針を打ち出しています。本校でもそれぞれの教師が実践しています。私は、先生方に「ALが形式的にならないように」と、よく話しています。ALは、単に話し合いの形式を取り入れればよいといったものではなく、個々が考えを深めていくことを目的とした手段の1つであることを、しっかり認識・理解する必要があります。

片山 本校では、SSHの1期目で科学的思考力の育成を目的に理科でALを研究し、2期目は、1期目で得た成果を全教科に広めようとしています。各教科の推進委員がほぼ月1回集まり、ALを通して育みたい力とその手法について話し合っています。



東京都足立区立千寿小学校 校長 田村正弘

「分かったふりをせず、
『分からない』と言える
子どもを育てたい」

す。現段階では、インプットの直後にアウトプットをすると、学習効果が高まるという考えから、全校で授業の振り返りを重視しています。ALには、「進度が遅れる」「準備が大変」という声もありますが、「活動を通して生徒の思考の過程が見えるため、授業の理解度を把握しながら授業を進められる」という声も聞かれます。ALの導入により、教師の意識が大きく変化していると感じます。

千葉 小・中学校に比べると、高校のALの実施率はやや低いと言わざるを得ませんが、県教育委員会は積極的に研修を実施していますし、教師も導入に意欲的です。また、先ほど加藤先生が形式的なALへの危惧に言及されましたが、全く同感です。

従来型の授業形態が全てアクティブではないとは言いい切れません。静かに考えている場面でも、脳に汗をかきくらい必死に考えているのなら、それは十分にアクティブな学びです。英語の授業がALそのものではなくても、生徒が習得した英語を外国に行つて使いたい、海外で仕事をしたいと本気で思ったなら、やはりそれはアクティブな授業と言えるのではないのでしょうか。

樋田 そう言えると思います。コインの表側が知識としたら、裏側には感情、感性、あるいはアイデンティティーがあります。知識だけでは社会とつながりにくいですし、逆にアイデンティティーだけが肥大化しているのも困りものです。英語の授業

で意欲が湧いて「海外で働きたい」と感じることも、コインの裏表と言えます。学びが「自分事」になるように配慮されたバランスの良い学習活動こそ、ALだと言えるでしょう。

田村 自分に引き寄せて考えることは、本当に大切だと思います。本校では、主体的な学習者を「『分からない』と、とことん言える子ども」と言い表しています。教師の説明や友だちの発表に対して、分かったふりをせず、納得できるまで考え続けられる力を伸ばすことを、16年度の研究テーマとする予定です。

思考力・判断力・表現力の育成は学校段階間の連続性が重要

木村 小・中・高の学びの連続性を考えることも大きなテーマです。

田村 小学校段階で習得させる「知識・技能」は、それほど高度なものではないので、本当に深い学習活動までには発展させづらい面があります。ただ、ALの本来の目的は学校段階が上がるにつれて達成されるものと、私は考えています。もちろん



小学校でも、「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を育みたいと思いますが、「知識・技能」のように、「小学校はここまで」といった指導・評価基準を設けるのは難しいのが現状です。これは、小・中・高がともに考えるべき重要な教育課題だと思います。

樋田 小・中・高で積み上げていくという視点は、とても大切です。大



「教師が
手をかけ過ぎなければ、
生徒は自分で考える」

高松第一高校 進路指導主事 片山浩司

学の授業ではAIが多く取り入れられていきます。その学びをより深いものとするために、早い段階から主体性を育むことが大切だと思います。

木村 教育心理学では、主体的な学習者には、自分の学習状況を客観的に捉える「メタ認知」、具体的な「学習方略」、「学習意欲」の3つが必要であるとされています。高校段階までにそれらを育むことが理想的です。

樋田 大学での学びは、自分で動かなければ得られません。自分で学習

主体的な学習者をどう育てるのか？

手をかけ過ぎない指導が
子どもの主体性を育む

木村 主体的な学習者を育むために

方法を工夫してこそ、学びを広げることが出来ます。小・中・高で知識や感性をバランスよく育てるAIを実践することは、大学進学後にも大きなプラスとなります。

木村 それは、社会にとってもプラスになることです。働き方は転換期を迎えており、今後はいかに付加価値を高めるかが求められます。大学時代までに試行錯誤して自分なりの解を見つける経験を積むことが、ますます重要になるでしょう。

求められる指導とは何でしょうか。

片山 本校は、生徒の主体性を尊重し、手をかけ過ぎない指導を心がけています。宿題を多く与える指導は、

下位層の底上げには有効ですが、それだけで満足してしまう生徒もいるからです。また、ヒントを与え過ぎると、どうしても出てくる答えが似てしまいます。多様な考え方があることを理解させるためにも、教師が教え過ぎない方がよいと考えます。

千葉 今日のお話で、小・中学校では主体的な学びを十分に積み重ねていることが分かりました。一方、高校では学習への動機づけをねらいとして、入学時に高校での学習方法を指導していますが、それでは、生徒が培ってきた主体性をリセットしているような気がします。手をかけ過ぎることで、生徒の主体性や創造性の芽を摘んでしまっているかもしれないという感じがしました。小・中学校で児童・生徒がどのような学びを経験しているのか、我々はおも



と学ばなくてはなりません。

樋田 むちゃと感じられる環境を与えることで、育つ力や姿勢もあると思います。いわゆる「ゆとり教育」の時代には、教師が手をかけ過ぎないことで子どもの創造性が育つと考えられていましたが、その効果はあまり見られませんでした。むしろ、涙を流すほど大変な思いをして答えを探したり、時間が経つのも忘れて昆虫について調べたりといった経験に、大きな意味があると思います。

片山 本校では、SSHでの課題研究において、生徒はほぼ自力で課題設定をします。そのため、研究過程でもかなり苦労するのですが、そうした生徒の多くは、「しんどかったけれど、よかった」と語ります。少し無理のある課題に取り組んだからこそ得られた充実感なのでしょう。

「苦勞を乗り越え、
体験を通して育つ力、
自信、意欲が大事」

埼玉県鴻巣市立吹上中学校 校長 加藤幸弘

加藤 教師は不安がありますが、時には生徒が失敗することも大切です。本校では、学校行事等の企画・運営を生徒に委ねており、失敗してもよいと繰り返し伝えていきます。苦勞を乗り越える体験を通して育つ力、自信、意欲は、学習にも結びつくと考えています。

田村 同感です。これからの教科学習では、答えを求めるだけでなく、その答えに至るまでの過程や答えの根拠を理解・説明できる力がますます必要とされるでしょう。例えば、15年度の「全国学力・学習状況調査」の理科では、水の温まり方について、誤った仮説が正しかった場合を想定して答えるという問題が出題されました。これは、学力観を転換しなければならないという、国からのメッセージだと受け止めています。そのような力は、成功体験だけでは伸びず、試行錯誤や失敗を経験することで身につけていくのだと思います。

外部リソースの活用が 学習活動に広がりをもたらす

木村 主体的な学習者を育むために

は、制度的にも学校段階を超えた連携が必要ですね。

田村 今後は、小・中・高の連続性をより意識した指導をしていきたいと考えています。足立区では、幼稚園から高校までが連携し、高校中退者の減少を目指した「U16プロジェクト」に取り組んでいます。基礎学力不足が退学の大きな要因になると捉え、幼児期にどのような体験が必要か、小・中学校でどのような指導をすればよいのかを検討し、学校段階ごとに目標を設定しています。

加藤 埼玉県では、15年度から県独自の学力調査を通じて、小学4年生から中学3年生まで一人ひとりの経年変化を追うことにしました。それにより、様々な取り組みが子どもの



学力や学習態度・意欲にどう影響しているのかを確認し、より個に応じた指導を行いたいと考えています。

千葉 教科学習だけではなく、部活動や学校行事など、様々な教育活動を通じて、生徒は伸びていきます。

校内はもちろん、地域のリソースも積極的に活用して、生徒が成長のきっかけを得られる場をこれまで以上に提供したいと思います。教師が写真を描き過ぎず、とにかくかけを与えて、どのような可能性につながるのかは生徒と一緒に考えるという姿勢で取り組んでいきます。

片山 本校は、SSH指定校として比較的恵まれた環境にあります。外部リソースを活用しながら、生徒の思考や議論を促し、探究を深めてい

「外部のリソースも活用し、 生徒が成長のきっかけを 得られる場をつくる」

福島県立福島東高校 進路指導主事 千葉 聡

く方法を引き続き模索していきたいと思えます。例えば、文系の生徒には、社会問題を議論して、市に解決策を提案するといった活動も考えられるでしょう。

木村 学校外の資源を活用するという観点は重要です。それを考える時、地域の教育力を学校とどうつなぐのかという視点が求められるはずだ。

樋田 我々大学もそうですが、外部リソース側は、むしろ「活用してほしい」と願っています。学生が児童・生徒と接することのプラス面は大きく、双方に利点があります。多忙化を課題として抱える先生方の負担を軽減するという観点でも、学校が地域のリソースを活用する意義は大きいでしょう。先生方の話を聞いて、児童・生徒、そして学び方や指導のあり方は大きく変容していると実感しました。大学も変わらなければならぬという思いを強くしています。

座談会で言及された、主体的な学習者を育むための高校の実践事例を次ページから紹介します。

